

## 福井県の小さなイタリア

ルクスオティカ福井めがね工業の鯖江新工場における  
学生向けインターンシッププログラム

海外交流 — 大阪大学人文学研究科の「人文学インターンシップ」との提携 —

ベルテッリ ジュリオ アントニオ\*

A little piece of Italy in Fukui

The internship programs for students at Luxottica Fukui Megane Industry's new Sabae plant  
and the firm's cooperation with the new internship courses of  
Osaka University's Graduate School of Humanities



2022年4月、大阪大学大学院言語文化研究科と文学研究科の統合により「人文学研究科」が誕生した。その際、人文学を専攻する大学院生（博士前期・後期課程ともに）のアカデミア以外における就職率を高めるため、座学を中心とした「人文学実務研究」と実地体験を重視した「人文学インターンシップ」という2つの授業科目が新設された。

筆者は2021年3月半ばから、言語文化研究科の山根聡副研究課長のご依頼を引き受け、文学研究科の金水敏先生が率いる「インターンシップチーム」に加わるようになった。インターンシップや企業における就職を自ら体験したことのない大学教員の私たちが急遽様々な企業に連絡をして、文系大学院生をインターンシップで2週間（実質10日間）ほど受け入れてもらう可能性を打診する運びとなった。コロナ禍で一度も対面で会えず、チームの各メンバーが個人的につながりを持つ様々な企業に声をかけ、オンラインミーティングを重ね続けてみたが、2週間のインターンシップと聞いて難色を示さなかった企業は一社もなかった。

新学期が始まり、チームに新たなメンバーが加わり、少しずつ新科目設置に注いできた努力が実り始めた。

2013年度（2014年1月）から、筆者は本学外国語学部のイタリア語専攻において、イタリア総領事館の協力を得て、「イタリア就職フェア」（Fiera Italiana del Lavoro — 詳細は「生産と技術」第72巻第4号、105-107ページにある菊池正和先生の記事を参照）というイベントの準備・実行に携わってきた。このイベントの目的はイタリア語専攻の学生たちの視野を広げ、新たな道、新たな可能性を切り開くと共に、4年間にわたって一生懸命勉強して習得したイタリア語やイタリア文化の知識を卒業後にも活用できるようにすることである。そのために、2社か3社のイタリアの企業、またはイタリアと何らかの形で関係を持つ日本の企業の代表取締役または顧問を大阪大学に招待し、各企業の概要と魅力を紹介していただいてから、アットホームな雰囲気の中で学生たちが自由に各企業の代表者と触れ合う場を設け、質疑応答と意見交換をしてもらっていた。およそ10年にわたって、イタリアファッション大手のArmani JapanやDIESEL Japan、イタリア高級家具のCassina IXC、イタリアや英国から自動車を輸入する八光自動車工業株式会社、イタリア食材の輸入に携わるモンテ物産など、多数の企業を招待することができた。

2021年の春にオンラインで行ったこのイベントにEssilorLuxotticaを招待することになった。この企業は世界最大のめがねフレーム、サングラス、レンズメーカーであり、レイバン、オークリー、アランミクリなど多数の有名自社ブランド（proprietary brands）、そしてファッション業界のトップブランドからライセンスを得て、めがねを製造・販売しており、その年間売り上げは約3兆円にも上る。イタリア北部・ミラノとパリ（フランス）に本社を構えているが、150か国以上にわたる物流ネットワーク



\* Giulio Antonio BERELLI

1976年7月生まれ  
大阪外国語大学大学院 日本語日本文化  
特別コース博士後期課程修了  
(2007年9月)  
現在、大阪大学大学院人文学研究科 外国語専攻（イタリア語） 准教授  
専門／幕末・明治初期における日伊交流史、同時期の旅行記（旅文学）  
TEL：072-730-5145  
(箕面キャンパス10F-1043号研究室直通)  
FAX：072-730-5145  
E-mail：bertelli.hmt@osaka-u.ac.jp



を誇り、非常に国際性の高い企業でもある。その日本支社である Luxottica Japan は 1990 年に設立され、東京に本拠地を構えている。そして、2018 年 3 月、Luxottica はめがね製造の優れた技術や伝統ある職人の技を誇る生産地として広く知られている北陸地方・福井県鯖江市に 1969 年に設立された福井めがね工業株式会社の株の 67% を取得することになった。多くの日本のメガネ製造業者が生産を海外に移転させた中で、主にチタニウムや 18K 金メガネフレームの製造に携わる福井めがね工業は、本来の日本の技術や職人の技を活かし、フレームの 100% を国内で製造するという揺るぎ無い「Made in Japan」のポリシーを持っている。この 2 社が提携してできたルックスオティカ福井めがね工業 (Luxottica Fukui Megane Industry Co. Ltd.) は、この Made in Japan に対する強いこだわりをもって製造されためがねをグローバルな枠組みに入れ、安定した品質水準を保証する日本の技術や職人の技の本質と素晴らしさを全世界に広めて知らしめようと尽力している。

この抱負を果たすべく、2021 年 4 月にルックスオティカ福井めがね工業は福井県鯖江市に新たな工場を設立することになった。敷地面積およそ 11000 平方メートルで、工場のほかにもアドバンスデザイン部門、ショールーム、そして庭園までもが設置されている。従業員は約 250 人で、国籍は様々であるが、日本人の次に多いのはイタリア人である。したがって、従業員同士は主に英語、日本語、イタリア語でコミュニケーションをとっており、様々な言語が飛び交うグローバルな労働環境となっている。

イタリア就職フェアでのプレゼンにおいて、福井めがね工業の担当者が鯖江新工場における 5-10 日間の夏季インターンシッププログラムについて触れたとき、筆者は「これは！」と思い、早速この旨をインターンシップチームに伝えた。その後、ルックスオティカ福井めがね工業とネット会議を開き、設立される予定の人文科学研究科の新たに設置された授業科目「人文学インターンシップ」(実地体験を中心としたもの)と「人文学実務研究」(座学を中心としたもの)に協力してもらえるかどうか、可能性を打診したところ、幸いにも先方は協力的な姿勢を見せてくれ、連携への第一歩が踏まれることになった。ただしこの連携を実現する道のりに立ちはだかる最大のハードルは、鯖江工場と大阪大学の間

にある物理的距離であった。「果たして、インターンシップのために福井まで行く学生はいるのだろうか?」というのが、私たちインターンシップチームが抱える最大の不安材料であった。

2022 年に入ると、豊中キャンパスに拠点を置く事務部の企画係の貴重な協力を得て、設立される予定の新研究科の準備が本格化し、まずは 4 月 26 日の説明会、そして夏学期 (6 月) から開講する予定の「人文学実務研究」の計画が徐々に具体化した。

この「人文学実務研究」というオンライン授業は、主に夏休み中に行われるインターンシップ実地体験を中心とした「人文学インターンシップ」に備えて行われるものとして、大学院生の就職に対する意識を高めることを主な目的とするものである。この授業において、人文学研究科の学生を集めて、連携企業や OB、OG の発表 (企業紹介など) を聞いてから学生同士でグループディスカッションをし、その際に上がった課題などについて発表をする構想である。

そしてついに 4 月 26 日の説明会が無事に終わり、新設授業の履修登録が開始した。「誰も登録しなかったらどうしよう?」と、冗談半分でチームのメンバーと心配していたが、両科目の登録者人数はそれぞれ 19 人だったので、とりあえずはほっとした。しかし休む暇はなかった。学生たちをがっかりさせないように、私たちインターンシップチームは新たな勢いで準備をスピードアップさせた。そして、「人文学実務研究」の授業が始まった。大阪大学出版会、塩野義製薬、大学生協、森合精機のプレゼンや学生たちの発表が無事終わり、ついに、7 月 6 日にルックスオティカ福井めがね工業がプレゼンをするようになった。

その時点ではまだ距離があり、旅費・滞在費がかかるせいか、あるいは企業やインターンシッププログラムに関する情報が不足していたせいか、残念ながらこの企業のインターンシッププログラムに申請した「人文学インターンシップ」履修生は一人もいなかった。チームが懸念していたことが実現してしまうのかと落胆していた頃に、研究科長の宮本陽一先生、人文学林担当副研究科長の宇野田尚哉先生らのご尽力のおかげで、遠方にある企業に申請を希望する「人文学インターンシップ」履修生のために旅費・滞在費の一部を賄う補助金 (一人当たり 3 万円)





図1：2021年4月に開設されたルックスオティカ福井めがね工業の鯖江新工場

の支給が決定された。

7月6日のルックスオティカ福井めがね工業の代表取締役の田畑周徳（たばたかねのり）氏、そしてイタリア人社員のCinzia Coden（チンツィア・コデン）氏によるライブプレゼンを聴いた学生たちはこの企業に関する詳細情報を得ることができ、その規模と労働環境の国際性の高さを知ることができた。

その後、ついにこの企業の夏季インターンシッププログラムへの希望者が二人現れた！

一人は外国学専攻（スウェーデン語）の阿部蒼俊（あべそうしゅん）氏で、10日間のフルコースインターンシッププログラムを選び、もう一人は言語文化専攻の張抒蔚（ちょう・ジョイ）氏で、5日間のプログラムに申し込んでくれた。

二人の学生から聞いた情報および先方から送られたプログラムによれば、このインターンシッププログラムの参加者は合計12名で、中国、ベトナム、インドネシア、フィリピン、アルゼンチンなど多国籍であった。それぞれの専門分野は経済から化学まで多岐にわたり、人文学専攻の学生は阿部氏と張氏だけであった。また、日本国籍の参加者は阿部氏を含み、2名だけであった。5日間プログラムは2022

年8月29日（月）から9月2日（金）までの間に行われた。勤務時間は毎日9時から16時までで、およそ1時間の昼休みがあった。張氏の話によれば、工場の周りに飲食店などはないので、学生たちは工場の中にある社員食堂で昼食を摂ることができた。

1日目に学生たちはオリエンテーションや安全衛生の研修を受けながら工場の見学をし、アイウェア製造の専門用語、めがねのコンセプトから製品までのプロセスなどを中心とした講義を受けた。ちなみに、講義で使われる資料は主に英語と日本語で書かれているが、時々イタリア語で書かれたものもあったようである。

2日目は主にめがねのチタニウムフレーム、アセテートフレームの生産過程見学、そして品質水準や品質保証などについての説明があった。

3日目は倉庫管理、マネジメントやロジスティクス、めがねの販売、人事についての説明や講義が開かれた。

4日目は「チャレンジデー」と呼ばれ、午前中はビジネスゲームが行われ、午後から学生たちは2時間の英語とロジックのテストを受けた。

5日目は「プレゼンテーションデー」で、午前中



は質疑応答やプレゼンの準備を行い、午後からそれぞれの学生が与えられた課題に基づき、15分程度のプレゼンを行い、そこで共通インターンシップが終了した。ただし、阿部氏のように、10日間プログラムを選べば、次の週（5日から9日まで）もインターンシップが続いた。阿部氏の話によると、この5日間には最初の5日間に習得した知識を活かすために学生たちは課題を与えられた後にそれぞれ違う工場の特定された部門に配置され、実際のめがね製造の現場に立つことになった。阿部氏の場合はアセテートフレームの製造部門に入り、仕事を見ながら「労働環境の問題点とその改善」について考える課題を与えられたという。この5日間に関して、阿部氏にとって最も印象的な点は、自分が現場を見て指摘した労働環境の問題点に対して提案した改善策やアイデアがすぐに仕事現場で採用されたことで、一般的な日本の企業では見られないこの柔軟性と動きの速さに驚いたようだ。

筆者によるインタビューに応じてくれた阿部氏と

張氏は二人ともこの経験に大変満足し、ルックスオティカ福井めがね工業にぜひ就職したいと話している。日本語、英語、中国語をはじめとする様々な外国語を操る二人にとって、この企業の最大の魅力はその「グローバル性」と「柔軟性」である。会話は主に英語や日本語で行われるので、英語が得意でない学生にその場で通訳をすることもあったと張氏は話している。

張氏と阿部氏の経験談を聞いて、筆者はルックスオティカ福井めがね工業と大阪大学の人文学研究科のニーズが合致していることを実感した。先方が二人にぜひ面接を受けるように勧めたことも、大阪大学人文学研究科の学生たちの魅力、特性と能力に大きな期待を抱いている証拠であるといえよう。

筆者はインターンシップチームの一員として、今後はますますルックスオティカ福井めがね工業と大阪大学人文学研究科、そして外国語学部との連携をさらに強め、多くの学生が自分の特性と能力に合った就職先を見つけるように尽力したい。

